

2015年度事業報告

(2015年1月1日～12月31日)

法人名称 NPO 法人 教育支援グループ Ed.ベンチャー

1. 事業成果

Ed.ベンチャーの活動を総括する際、欠かせないのは「その時の世の中の動向」である。その時々世の中の状況を見据えて、「行動宣言」に掲げる理念を実現する活動を展開できたかどうか、Ed.ベンチャーの活動の是非はそこが問われることになる。

2015年の世の中の動向として、最も注目すべきは、「安全保障関連法」が国会を通過したことであろう。この出来事の意味は、政治と経済の両側面から捉えることができよう。

政治の側面では、ほぼすべての憲法学者が違憲とする「安全保障関連法」が、憲法改正を待たずに、憲法の解釈変更だけで合憲を主張するという「民主主義」「立憲主義」に反するやり方で、国会を通過したということである。決して少なくない国民が反対する中、選挙で選ばれた議員からなる国会で、説得的な説明が行われぬまま、十分に議論を行ったという前提で、採決が強行されていく。それは、学校教育を通じて学んできた「日本国憲法の三大原則」（国民主権、基本的人権の尊重、平和主義）が、不断のものではないことを理解するのに十分な光景であった。そして、その光景は、この国に住む人々にある種の無力感を感じさせたのではないかと思う。しかし、それと同時に、その過程で「民主主義とは何か」、「憲法とは何か」、「平和の実現に向けた手段として、何を選ぶべきか」という問いを前景化したSEALDsに代表される若者たちが現れ、ある種の灯りを灯したことも疑いのない事実であろう。

経済の側面は、「安全保障関連法」の成立の背後で、新自由主義的施策は粛々と進められてきたということである。例えば、2015年9月11日に成立した「改正労働者派遣法」では、派遣社員を受け入れる期間の制約が事実上撤廃されることで、生涯派遣で働くことを容易にすることが懸念されているものである。2015年8月現在、日本の非正規労働者は37.1%になり、3人に1人は非正規雇用という時代である。このような不安定な労働は、子どもたちに、経済格差として直接襲いかかるというだけでなく、将来への不安として間接的にも襲いかかる。それは、将来への不安から現在に対して前向きにならないというだけでなく、将来の不安から現在の環境の中で勝ち抜こうと躍起になり排他的になるという態度として表れている。さらに付け加えれば、「安全保障関連法」の成立は、これまで平和主義を背景として制限がかけられてきた軍需産業や自衛隊入隊を経済の一つの柱とする可能性へと開くことにもなっているの

である。

以上のように、政治・経済の両側面から出来事を整理する時、政治と経済は連動しているということにとどまらず、今や、経済が政治を主導する社会状況が生み出されつつあることが理解されよう。

この理解に基づいて、今一度「行動宣言」を読み返すとき、そこに示された行動だ

けでは現状に抗うことが難しいほどに、社会状況は悪い方向に加速度をつけて進んでいることがわかる。つまり、今や行動すべき事柄は、行動宣言のもっと先なのである。

このような行動宣言の先に進む社会の状況を捉えて、今年1年 Ed. ベンチャーが活動をできたかと問えば、やはり心許ない。それでも先を照らし出す灯りとして、次の点は特筆できよう。(1) 外国人の若者の労働問題として浮上してきた働き方を受けて、「労働教育」を柱とする学習会が始まったこと、(2) 若者世代を中心に今まさに問われている「民主主義」に関わる学習会が組まれたこと、(3) 広い連帯に向かって、子育て中のママたちが参加できるような保育の体制が組まれたことである。

閉塞状況は強まりつつある。それでも、突破口を見いだす小さな灯りを灯すことをやめるわけにはいかない。その動きをやめた時に、闇はやってくるのである。

2. 事業内容

学校支援事業 ①理論学習会

【事業総括】

大和市で働く若手教員を中心として本学習会は行われた。学校で出会う子ども達や親が抱える「大変さ」の背景や、学校を取り巻く世の中の状況を知り、学校現場を多面的に捉えることが必要だと考え、各テーマを設定した。

学習を重ね、経済状況の格差や、それに伴う労働環境の劣悪化が人を「使い捨て」にする現状があることを知り、そのような社会基盤の上で子ども達や私たち自身の毎日が成り立っているということを自覚しなければならぬと感じた。さらに、民主主義についての学習会の際には消費者民主主義という言葉が上がり、主体性をもつことの難しさが議論された。消費文化が浸透し経済もそれありきで回っている現在、消費することしか知らない私たち世代は、主体として立ち、責任を負って物事や行動を選択するという事について認識や体感が薄いのではないか。格差が大きくなり、そのしわ寄せをくうのは、日々の生活に追われ、子育てに向き合うことができないお母さんや、借金を抱えながらブラック企業で安く働かされる若い人たち、社会的権利もないままに労働力として酷使される外国人の人たち。報われない・救われない感覚が充満する中で、世の中を圧迫する力は、さらに自分より弱い立場を圧迫していく。その最たるものが、ヘイトスピーチであった。自分と異なる他者に対して「お互いさま」ではなく、排外的な空気感が今後より一層強まった時に、きっとそれは社会の縮図である学校の教室の中でも避けられない課題となるだろう。

「知りたいことを知る場」として本学習会は機能したが、各テーマを深め、学校現場の「現実」に落とし込んで考えるまでには至らなかった。「実際、学校現場はどうか、子どもはどうか。」と、現場の事例と引き合わせ、現状と比較して、議論と現場が離れすぎないよう課題を捉えたい。次年度は、「勉強になる場」から、「自分なりの解釈をもって自分の学校や子どもについて話せる場」として機能するよう、テーマと議論の場を設定したい。もう一つの課題として、継続的な新規の参加を募るのが難しかった。今後は、本学習会の意図や意味合いを明確に発信していく必要がある。

参加者とともに考えることのできる場として、来年度も事業を継続していく。

スタッフ氏名	事業担当者：村本綾 吉間里依 池田喬 前田拓郎 下新原なつみ 馬場有希 清水美希 (のべ従事者数) 24名
内容・日時・ 場所・参加者 数	<p>4/20 (月) 参加人数：26名 講演「いじめ問題から集団をとらえ直す」 講師：清水睦美氏 (日本女子大学教授)</p> <p>5/11 (月) 参加人数：19名 文献講読「学力と人間らしさをはぐくむ—新指導要領をのりこえる—」 著者：梅原利夫 (和光大学教授)</p> <p>6/1 (月) 参加人数：17名 講演「主人公としてともに生きる実力とは—国家からのプランと市民 の願い—」梅原利夫著</p> <p>7/6 (月) 参加人数：15名 実践報告「大和に暮らす外国人の子どもを知る」 報告者：スタッフ4名</p> <p>8/24 (月) 参加人数：17名 学習会「大和に暮らす外国人の子どもを知る～小5 6 教室の実践を通して 見えたこと～」 報告者：スタッフ4名</p> <p>9/13 (日) 参加人数：14名 (うち子ども3名) 学習会「子育ての現状から家庭での影響を受ける子どもについて理解 を深め、学校の役割を考える」 報告者：スタッフ3名</p> <p>10/3 (土) 参加人数：14名 実践報告「家庭のせいにするのではなく、教師 (学校) ができること として何があるのかを考える」 報告者：外崎瑞代 教諭 (大和市立北大和小学校)</p> <p>11/2 (月) 参加人数：12名 学習会『「主権」について考える』 参考文献：「日本人は民主主義を捨てたがっているのか」想田和弘著 報告者：スタッフ2名</p> <p>12/7 (月) 参加人数：11名 文献購読『「ヘイトスピーチ」から考える人権～排外主義とは～』 文献：『ヘイトスピーチ「愛国者」たちの憎悪と暴力』安田浩一著 報告者：スタッフ7名、西岡 歩 教諭 (座間市立栗原中学校)</p> <p>※9月、10月の開催時間は14:15～16:00、他の月は19:15～21:00 ※7月、10月の会場は渋谷学習センター (IKOZA)、他の月は富士見文化 会館 (事業参加者総計 145 名)</p> <p>〈合同理論学習会 講座 全2回〉 「労働法と学校教育のつながりを探る」</p>

	10月20日(火) 19:00~21:00 富士見文化会館 参加人数: 22名 第1回 学校教育につながる労働をめぐるルール 講師: 鍛冶 邦彦氏(県中央地域連合事務局長) 11月24日(火) 19:00~21:00 富士見文化会館 参加人数: 27名 第2回 ブラック企業の実態と対処法 講師: 嶋崎量氏(神奈川総合法律事務所 所属弁護士) ※ 合同理論学習会に関する支出は、理論学習会が担った。
収入金額	137,000円
支出金額	28,152円(印刷製本費900円、賃借料27,252円)

学校支援事業 ②授業研究会〈小5・6教室〉

【事業総括】

今年度は教師が外国にルーツをもつ子どもを教えるときに必要な知識を身につけ、より広い視点をもって授業を行えるようになること、子ども達同士が関係を築ける場にすることをめざした。

今年度直面した問題には以下の2点がある。1つは母国名から日本名に変える問題だ。日本生まれのかれらは母国という感覚の薄さから知識や背景のないままに日本名に変えていくことが多い。そこには、学校や日本社会全体にある日本人の方が得、日本人と同じでなければ、という空気が大きく影響しているのではないか。そのような空気の中で生活していくことで、かれらが自分とは何か考える時に母国の要素が否定的な側面になり、外国人である自分を否定しているように感じる。

2つ目に、遊ぶ場所や時間を制限され、親に逆らえない女の子の問題があった。遠足時には教師が親と直接会い、理解してもらうことで、女兒の参加につながることもあった。去年は教室に来ることや遠足に参加することを母親に話せず、許可をもらうことすら最初からあきらめていた女兒が、自分の気持ちに向き合い、実現しようと行動したことが参加する結果につながった。言葉の壁があり、思いがうまく伝えられなかったり、日本ではなく母親が生まれ育った国の教育観にしばられたりする彼女だが、母親との信頼関係が芽生え、自分の思いを伝えられるようになってきている。教室の中で他の友だちの家庭の様子を知ること、自分と母親との関係を客観的に見つめられるようにしたい。

小学校高学年は中学校との節目のため、日本名に変えることで日本社会に同化しようとするケースが多く、自分の存在について考え揺れ動くことが多いように思われる。外国人である自分を否定的に見て、日本に同化してしまっからの働きかけは難しい。節目であり、揺れ動くこの時期だからこそ、教師の立場で、外国人の子どもたちと、外国人であることについて考えていくことにはとても意味があるように考える。

今後も外国人のかれらが直面する問題を知ることや、かれらを変えてしまう日本社会を客観的に見る視点を養うことが重要であると考え。次年度は理論学習会や外国人の子ども理解のための学習会等でそのような視点を持ちながら学習していきたい。

スタッフ氏名	事業担当者 下新原なつみ 前田拓郎 馬場有希 清水美希 (のべ従事者数) 63名	
内容・日時・場所・参加者数	1月10日 正月遊び・餅つき 24日 自分紹介準備 2月7日 自分紹介準備 14日 自分紹介 発表 3月7日 卒業式事前準備 14日 卒業式事前準備 28日 卒業式 4月18日 オリエンテーション 詩づくり 5月16日 自分新聞 23日 地区探検① 6月13日 地区探検② 27日 地図作り 7月11日 地図作り 25日 お話 8月22日 遠足に向けて 9月12日 遠足に向けて(小田原についての事前学習) 19日 遠足に向けて(昼食場所、体験内容等) 10月10日 遠足に向けて(見学場所の予約等) 24日 遠足に向けて(しおりづくり) 11月7日 遠足に向けて(しおりづくり) 14日 遠足に向けて(最終確認) 21日 遠足 小田原 12月12日 クリスマス会に向けての話し合い 26日 クリスマス科学実験	11名 7名 7名 7名 7名 8名 9名 7名 6名 5名 5名 5名 4名 2名 2名 4名 4名 4名 3名 3名 3名 6名 5名 4名 (事業参加者総計128名)
収入金額	0円	
支出金額	19,418円(旅費交通費9,450円、消耗品費5,868円、印刷製本費500円、賃借料3,600円)	

学校支援事業 ③教育講演会

【事業総括】

2015年度教育講演会は、大阪大学大学院教授、志水宏吉先生を講師に迎え、「しんどい子を支えることはしんどい子のためだけじゃない」というテーマで行った。

しんどい子=家庭環境に課題を持つ子への支援について、大阪の中学校が行う同和教育の実践を元にお話いただいた。しんどい状況で苦しむ子に対し、教師、学校、地域がつなぐりの手を増やし支える方法が、「スクールバスモデル」として紹介された。講演後の大和

市内の事例報告では、様々なつながりのあり方が報告された。そこから見えたのは、子どもたちを支えるためには、多様性を含んだ集団の中で、色々な人同士が、様々な形でつながることが大事であるということ。子ども同士、児童・生徒と教師、学校と家庭、学校と地域など、様々なつながりを生む中心として、教師・学校が担う役割は大きいこと。格差拡大が進み、排他的な雰囲気の中、つながりが絶たれてしまう社会。そんな状況に置かれる学校現場で、教師には、それでも多様性を受け入れる覚悟が求められること、である。そして、スクールバスとして紹介されたように、教師集団・学校として、その覚悟を共有していかなければならない。

これまでの教育講演会で取り上げてきたテーマの根底には、新自由主義がもたらした問題が存在した。そこで、2016年度は、格差の元凶である新自由主義に対峙するモデルを知り、私たちの日々の取組をその方向へ変えていくことを考える講演会とするため、講師に平川克美先生をお迎えすることに決定した。

事前学習会として、平川氏の著書である『グローバリズムという病』の講読会を行った。新自由主義に対する批判的な見方や、多国籍企業化した株式会社が、地球規模での経済活動を行うグローバリズムによって、国民国家という枠を超えた存在となってしまった構図について学習した。担当からの呼びかけが不足し、参加者が少なかったという反省点はあるものの、学習会を受け、講演会内容・構成を講師と打ち合わせをし、当日に向けて準備を進めてきた。

スタッフ氏名	事業担当者 池田喬 松永雅文 西岡歩 (のべ従事者数) 15名
内容・日時・場所・参加者数	<p>○2月21日(土) 13:30~16:30 2015年度教育講演会 「しんどい子を支えることはしんどい子のためだけじゃない」 講師：志水宏吉先生(大阪大学大学院教授) 大和市渋谷学習センター 多目的ホール 参加者 55名</p> <p>○8月18日(火) 18:00~21:00 参加者 5名 2016年度講師テーマ検討会(大和市渋谷学習センター学習室)</p> <p>○10月29日(木) 19:00~21:00 参加者 9名 文献講読会(富士見文化会館)</p> <p>○11月12日(木) 19:00~21:00 参加者 12名 文献講読会(富士見文化会館)</p> <p>○12月6日(日) 18:00~20:00 参加者 5名 講師打ち合わせ 東京 隣町珈琲 (事業参加者総計 86名)</p>
収入金額	70,000円
支出金額	195,942円(旅費交通費 30,000円、通信運搬費 14,350円、消耗品費 714円、会議費 17,335円、印刷製本費 35,920円、賃借料 17,508円、諸謝金 30,000円、雑費 702円、業務委託費 49,410円)

学校支援事業 ④学校相談・教師相談

【事業総括】	
<p>本年度の学校相談は市内小学校の1件で、長期休暇直前の来日で、学校からの十分なケアが得られない児童の受け入れに関する相談を行った。教師相談は、市内中学校から大学への長期研修を行っている会員に対して、研究相談支援を3回行った。</p> <p>学校相談・教師相談として取り組むべき継続的な相談はなく、事業としての役割は終了していると判断できた。</p>	
スタッフ氏名	内藤順子・松永雅文・清水睦美 (のべ従事者数) 8名
内容・日時・場所・参加者数	<p>学校相談 7月28日14:00～16:00 当法人事務所 3名</p> <p>教師相談 5月27日、7月13日、10月11日 適宜 9名</p> <p>(事業参加者総計 12名)</p>
収入金額	0円
支出金額	0円

外国人支援事業 ⑤お父さんとお母さんのための日本語教室

【事業総括】
<p>教室への参加者の顔ぶれが全く変わり、若者を中心に参加者の年齢層が変化した。以前は言葉の習得と生活全般に渡る支援の要求がかなり強く、「生活相談」がなくなったことで、出席の目的が半減したのではないかと推察された。一方、若者達は、生活は何とかなるので、純粋に言葉を獲得したいと考えているようだ。指導内容もそうした要求に即して変化させた。以前は新聞を読みたいという希望があり、漢字練習も取り入れたが、今年度はある程度、日本語を理解していても、まだ初歩的な段階の生徒が多く、日常生活で意志の疎通を図るのに必要な言葉の獲得を中心に指導した。特に数日前に来日したという参加者が多く(多い時は2～3、4人ということもあった)教室内での理解度の差で、指導上困難をきたした。そのため市販の簡単な平仮名・片仮名の練習帳を購入し、参加者の誰もが有意義な時間を持てるよう配慮した。</p> <p>11月に参加者の懇親会を例年通り開催したが、出席者も少なく、従来とは様変わりした。料理の持ち寄りパーティーを企画していたが、若者が多いこともあるのかスタッフの作った豚汁パーティーとなった。経済的な問題や、家庭の事情から持ち寄ることは難しかったようだ。</p> <p>若い親たちが子どもの勉強を見て欲しいと連れてくることも何回もあり、その都度、すたんどばいミーを紹介したが、此のあたりの連携も今後必要になるだろう。また、参加者のコミュニティーのようなまとまりが出来つつあったが、現在は友達同志の繋がりはあるもののそれ以上ではないし、まとまりを作ろうにも出席が不定期で繋がれないのが現状である。今後は若い年齢層の要求にどう答えていくかが課題となるだろう。</p> <p>なお、本事業は、すたんどばいミーからの要請により、2016年よりすたんどばいミーの事業として展開していくことになった。当事者団体の事業となることで一層の発展を期待</p>

すると同時に、お手伝いできる部分はお手伝いしていきたいと考えている。	
スタッフ氏名	事業担当者 武内敏子、福島聖子 (のべ従事者数) 139名 (ボランティア5名を含む)
内容・日時・ 場所・ 参加者数	内容—生活に必要な日本語の獲得を目指す。 日本の習慣・文化・制度を知る。 日時—毎週日曜日午前10時～12時 開催日 1/11, 1/18, 1/25, 2/1, 2/8, 2/15, 2/22, 3/1, 3/8, 3/15, 3/29, 4/5, 4/19, 5/10, 5/17, 5/24, 5/31, 6/7, 6/14, 6/21, 6/28, 7/5, 7/19, 7/26, 8/2, 8/9, 8/23, 8/30, 9/6, 9/13, 9/20, 9/27, 10/4, 10/11, 10/18, 10/25, 11/1, 11/8, 11/15, 11/22, 11/29, 12/13, 12/20 (合計43回) 場所—大和市立渋谷中学校解放「下和田の郷」 事業参加者総数—329名
収入金額	31,800円
支出金額	41,502円 (印刷製本費10,950円、消耗品費9,102円、会場費21,450円)

外国人支援事業 ⑥保証人事業

【事業総括】

外部の奨学金を受ける際に、保証人を用意できない外国人の学生に対し、「保証人グループ」を構成し、保証人を引き受ける事業である。

今年度の新規対象者はおらず、昨年度までの対象者4名のうち1名が1月に返金を終了し、12月現在の対象者は3名となった。特に心配される対象者については、月1回の個別面談を行ったが、その中で以下のような外国人の労働問題、生活状況が見えてきた。

- ・ 劣悪な労働条件下で働き続けている。(ブラック企業)
- ・ 住民税の滞納や社会保険への未加入が続いている。
- ・ 給与明細の内容が理解できていない。
- ・ 給料を計画的に使うことができず、常にお金がない状態。
- ・ 将来を見越した生活設計がなく、とりあえず今生活できればよいというスタンスでアルバイト生活を続けている。

こうした問題の原因の一つは、日本社会のしくみや労働法を十分に理解していないことにあると考えられる。これらの問題を報告会で取り上げる中で、「労働教育」の必要性を説く声が高まり、「労働法と学校教育のつながりを探る」と題した合同理論学習会を開催するに至った。学習会では、鍛冶邦彦氏・嶋崎量氏を招き、労働基準法の内容、ブラック企業の実態とその対処法を具体的にお話していただいた。労働者の権利を守るために必要な知識を、学校教育で扱う事がいかに大切なことか、特に外国人が日本社会で生きる上で必要不可欠であることを改めて痛感した。

来年度は、授業研究会において「労働教育」を学校現場でどのように実践していくか模索していく予定である。

スタッフ氏名	事業担当者 神戸芳子 洲崎仁美 他6名 (のべ従事者数 110名)
内容・日時・場所・参加者数	<p><内容・日時></p> <p>①定例報告会 1/31 (土) 16:30~19:00 基金の会報告会と合同開催 7/30 (木) 18:00~19:00 全2回</p> <p>②臨時報告会 9/24 (木) 20:30~21:00 対象者からの報告とお願い</p> <p>③担当者会 7/21 (火) 19:00~20:00 対象者からの相談に関する 情報整理と対策</p> <p>④個別面談 1/4,1/6,2/6,2/19,3/6,4/17,5/1,5/7,6/2,6/6,6/29, 7/6,7/22,7/30,8/6,8/31,9/6,9/8,9/9,9/28,10/25,10/28, 11/6,11/27,12/2,12/6,12/8,12/28,12/30 19:00~23:00 以上基金の会と合同対応 全30回</p> <p><場所></p> <p>① ② 渋谷中学校開放「下和田の郷」、富士見会館</p> <p>① ④ 当法人事務所 (事業参加者総計●●●名)</p>
対象者数	保証対象者 3名 (12月現在) 高校奨学金1名、日本学生支援機構1名 国際医療福祉大学熱海病院看護師奨学金1名
収入金額	0円
支出金額	2,967円 (会場費)

外国人支援事業 ⑧すたんどばいみー基金の会

【事業総括】	
<p>2014年度のまとめとして1月に行われた報告会は、年々報告のレベルが高まっており、基金の会利用者たちの成長を強く感じることでできるものとなっている。</p> <p>本年度、新たな基金利用者はいなかった。返金に関しては、海外で就労している者も含めて、おおむね順調であった。しかし、下記の個別面談①のケースにおいては、突然住居が変わり連絡がつかなくなるなどの問題もあったが、その背景には、本人に不利益をもたらしかねない就労実態の事実があり、個人的な問題ではなく、社会的な問題として認識されるべきと判断した。そのため、弁護士への相談や、合同理論学習会での若者のブラックな就労実態を取り上げての学習につなげた。</p>	
スタッフ氏名	内藤順子・清水睦美・常任委員8名
内容・日時・場所・参加者数	<p>(1) 2014年度報告会 2015年1月31日(土) 16:30~19:30 渋谷中学校学校開放「下和田の郷」、参加者21名</p> <p>(2) 個別面談</p> <p>①支援者1名 各月6日前後 (保証人事業と共同)</p> <p>②支援者1名 各月25日前後 総計12名</p> <p>③支援者1名代理人 各月第1日曜日前後 総計12名</p>

	(事業参加者総計 45名)
収入金額	0円
支出金額	10,222円(報告書送付 3,332円、報告書印刷 6,890円)

外国人支援事業 ⑨子どもの居場所・学習教室

<エステレージャ・ハッピー教室>

【事業総括】

- ・大和市在住の外国人の子どもたちへの学習支援を行った。新規参入する子どもが増え、他市からの参加者も多く、外国籍の子どもたちにとって必要な場所であることを再確認させられた。しかし、子どもたちが恒常的に参加できる体制を築き上げることができていなかった。
- ・子どもたちの企画によるイベントを通じて子どもたちの関係性を構築することを目指したが、子どもたちの恒常的な参加を得られることができず、また、子どもたちの学習支援で一杯であったため関係性をうまく作り上げることができなかった。
- ・子どもたちの参加への働きかけはできた。

<小学生教室>

- ・子どもたち個々の学習状況に応じた長期的支援については十分にできなかった。
- ・全く日本語が分からない子どもたちの参入というニーズが生じたことに対して、日本語学習を重点的に支援できたことは良かった。
- ・小学生の学習指導を通して、就学前を含む子どもたちに対する学習支援を重点的に行う必要性が認識されたので、冬休み中に低学年教室を行ったのは良かった。来年度も継続して実施したい。

<中学生教室>

- ・すたんどばいみーのキャンプに参加して外国籍の先輩に出会う機会を設けることはできた。しかし、すたんどばいみーとの共催であったにもかかわらず、参加する中学生の個々の課題をきちんと把握し、スタッフ間で十分な討議をした上で準備、参加するまでに至っていなかったため、共催とは名ばかりですたんどばいみーに依存した形の参加となってしまった点など、準備や参加のあり方等について反省する点が多くあった。
- ・高校生に対して進路のアドバイスとサポートを行った。その過程で高校生が生活や経験の量や職業についての知識が乏しく進路選択が曖昧になることが明らかとなったので、中学生段階から将来の進路を見据えた学習の機会を設けることが必要であることが認識された。

スタッフ氏名	事業担当者 篠原弘美 福島聖子 内藤順子 家上幸子 坂口晶紀 馬場貴司 吉間里依 今野佳和 西山成美 (のべ従事者数) 378名
内容・日時・場所・参加者数	土曜教室：10:00～12:00 林間小学校 鶴間コミセン 1/10, 1/17, 1/24, 1/31, 2/7, 2/14, 2/28, 3/7, 3/14, 3/21, 3/28, 4/4,

	4/11,4/18, 4/25, 5/2, 5/9, 5/16, 5/23, 5/30, 6/6, 6/13, 6/20, 6/27, 7/4, 7/11, 7/18, 7/25, 8/1, 8/8, 8/22, 8/29, 9/5, 9/12, 9/19, 9/26, 10/3, 10/10, 10/24, 10/31, 11/7, 11/14, 11/21, 11/28, 12/5, 12/12, 12/19, 12/26 定期テスト対策：18:30～20:30 鶴間コミセン 柳橋コミセン 5/19, 6/9, 6/16, 6/23, 10/29, 10/30, 11/12, 11/13, 11/20, 冬休み特別教室：10:00～14:00 林間小学校 富士見会館 12/23, 12/27, 12/28 (事業参加者総計 707名)
収入金額	0円
支出金額	184,303円(旅費交通費12,841円、消耗品費73,161円、印刷製本費14,695円、賃借料82,106円、謝礼金1,500円)

<Kokusai B. G. >

【事業総括】	
<p>厚木市および近隣地域に在住する外国人の子どもたちを対象に基本的に週1回学習支援を中心に活動してきた。</p> <p>現在大学生・高校生となっている子どもたちには、全体で集まって活動する機会が持てなかったため、個別対応で受験勉強や進学相談に応じた。この世代は学資の工面やアルバイトでの問題、就学の継続、家族や友人との人間関係等が問題となった。彼等は成人に近づき、学習面ではないところでの課題が立ちあがってきているので、スタッフとしては必要に応じて連絡を取ったり、面談をしたりしながら支援を継続している。彼らには当教室の先輩としてかかわり続けて欲しいと考えているが、そのためにはスタッフ側が彼らとの関係を維持する努力をしなければ難しいと感じている。</p> <p>小中学生については、基礎学力の定着を心がけて指導してきた結果、徐々に成果が表れている。また、ある程度学力のある子どもに対しては新聞などを教材にして、幅広い知識が習得でき、考察する力が着くよう工夫した。中学生には学校の勉強を中心に学習支援している。</p> <p>一方、常に参加できるスタッフが少ないために、手厚く支援しなければならない日本語能力の低い高校受験生には十分対応できなかった結果、教室を離れてしまった。慢性的なスタッフ不足がこの教室の課題でもある。</p>	
スタッフ氏名	事業担当者：家上幸子、福島聖子、保坂克洋、内藤順子、額賀美紗子 (のべ従事者数) 109名
内容・日時・場所・参加者数	内容：学校の学習の補習・宿題、大学・高校の受験勉強、進路相談、自動車免許受験勉強 日時：原則毎週土曜日14:00～16:00、不定期に個別指導・相談等 開催日：1/10,1/17,1/24,2/7,2/9,2/14,2/28,3/7,3/21,3/28,4/4,4/11,4/18,5/2,5/9,5/16,5/23,6/5,6/13,6/20,6/27,7/4,7/25,8/8,8/15,8/22,8/22,8/29,9/5,9/12,9/29,10/3,10/10,10/15,10/31,11/7,11/14,11/21,11/28,12/5,12/12,

	12/19,12/26 (合計 43回) 場所：あつぎ市民交流プラザ (アミューあつぎ)、Ed.ベンチャー事務所など (事業参加者総計：118名)
収入金額	0円
支出金額	33,081円 (旅費交通費 3,750円、消耗品費 8,471円、賃借料 18,350円、印刷製本費 2,510円)

外国人支援事業 ⑩当事者活動支援

【事業総括】	
<p>例年、やまと市民祭参加費用と印刷費用という金銭的援助に終始してきたが、本年度は、すたんどばいみーの自立的な活動が大きく展開し、年度計画を越えて事業展開をすることとなった。特に、すたんどばいみーの教室に通いつつも、学校不適合となっている外国人中学生に対しては、公共の相談機関と連携しつつ、生徒の成長をきめ細かく観察し対応する活動の後方支援を行った。</p> <p>以上のような展開を踏まえて、今年度末には、Ed.ベンチャーの事業の一部を、すたんどばいみーが引き受けて独立する宣言が出された。それを受けて、次年度の本事業の役割は大きく変更を迫られると考える。</p>	
スタッフ氏名	宮脇英理・劉麗鳳・チュープサラーン
内容・日時・場所・参加者数	<p>(1) やまと市民祭への出店応援 5月9・10日(土日) 応援者総計6名</p> <p>(2) 障がいをもつ外国人生徒への対応をめぐる学校との協議</p> <ul style="list-style-type: none"> ・7月21日 すたんどばいみーより相談 総計4名 ・学校との協議の設定 8月25日・10月1日 総計18名 ・公共機関との連携の場設定 12月10日 総計6名 <p>(事業参加者総計34名)</p>
収入金額	0円
支出金額	80,534円 (印刷製本費 55,970円、広告費 24,564円)

学校及び外国人支援に関する普及啓発事業 (⑪)

【事業総括】 普及啓発事業全般としては、飛躍的に展開した1年であったと評価できる。そのため後期からは1名スタッフを増員して事業を展開した。	
<p>第1には、広報誌「Ed.べん便り」No.5-No.10の計6号を発行した。教育講演会での「つながり格差」をスタートとして、主に「貧困」問題に焦点をあて、教育との関係を検討する普及啓発を行った。会員以外の読者からも「読み応えがある」との評価もあり、今後も問題提起の媒体として意識的に展開したい。</p>	

第2には、当法人の事業紹介を通しての普及啓発として、HPの改定を行った結果、会員はもちろんのこと会員外でのアクセスも増え（3451 カウント）、事業内容の紹介だけでなく、成果を報告することの意義は大きいと判断された。ただし、パンフレットについては、予算との関係で改訂にとどまり、普及啓発の効果は大きくなかった。

第3には、Ed.ベンチャーでの講演の記録を体系的に保存する体制を整え、資料としての使用を可能にする体制を整えた。

第4には、保証人事業・基金の会事業において知り得た「ブラック企業」で働く外国人への理解を深めるために、理論学習会・保証人事業と連携し、かつ、県中央地域連合との合同企画で、「労働法と学校教育のつながりを探る」と題する連続講座を事務局を中心に企画運営した。この事業での学習は、来年度の授業研究会の事業で引き受けられ、さらに学習を深めていく予定になっている。

なお、年度当初の計画に盛り込んだ「寺子屋事業における外国人支援」については、年度途中に「すたんどばいみー」による事業として法人決定し、その後は当事者活動支援への移行を行った。

スタッフ氏名	清水睦美、 武内敏子、チューブサラーン、家上幸子、下新原なつみ、角替弘規
内容・対象者	①パンフレット②Ed.ベンだより ：会員、当法人関係機関、大和市内の学校機関 ③講演録、読書会資料の配布：希望者 ④HP：一般公開
収入金額	81,570 円
支出金額	314,668 円（HP デザイン等 220,200 円、Ed.ベンだより 28,454 円、読書資料購入等 63,936 円、雑費 2,078 円）

法人の事業円滑実施のための活動（⑫）

全体として遅滞なく円滑に法人事業が展開できる足場を提供できた。事務局運営に関しては、当初計画の4名から1名増員して、⑪で提示した普及啓発活動を積極的に展開した。総会は2015年2月21日、活動報告会は11回（内3回2014年度分）、事務局会議は、22回（内3回2014年度分）を行った。

さらに、ボランティア保険の検討、研修会参加に関わる旅費交通費補助などの内規の検討、事務所に防音工事の実施も行った。

スタッフ氏名	事務局：6名 活動報告会：25名 総会（正会員）：100名
内容、回数、場所	①事務所開所：平日 10:00-17:00（当法人事務所） ②事務局会議：22回（当法人事務所） ③活動報告会：11回（富士見文化会館） ④総会：2015年2月21日（大和市渋谷学習センター）

	⑤監査：2015年2月8日（当法人事務所）
収入金額	0円
支出金額	617,902円（諸謝金8,000円、通信運搬費119,583円、消耗品費192,996円、印刷製本費14,360円、ガス水道光熱費75,179円、賃借料198,840円、雑費8,944円）

3. 特別会計事業

⑬東日本大震災支援事業

【事業総括】4年がたち、被災地へのまなざしが薄れ始める状況の中で、それでもある程度の「継続」を意識し、可能な中で取り組んできた。

陸前高田の「まつ」へは、理事会に出席するなどしてきたが、今後の取り組みをどのように展望し、どのように関わりを持ち続けるのかが、問われるところへさしかかっているのは紛れもない。「まつ」の論議を待たなければならない。すたんどばいみーの避難所の子ども支援は、その後の子どもの様子を知る、という活動において継続された。子どもたちのその後においては、子どもの成長に伴い、様々な状況の変化が生まれており、こどもを取り巻く地元の資源とのつながりが決定要因となっている。すたんどばいみーの支援の役割も、限定的なものになってきている。なお、陸前高田の仮設住宅を事務所として借用してきたが2015年8月をもって返還した。

石巻におけるライオン学校は、支援の中心メンバーの就職などにより、「閉校」したが、「その後の様子」支援として家庭訪問を行ったりした。12月には、ライオン学校の中学3年男子3人が神奈川を訪れるなど、子どもたちの成長によって、予想外の展開も見せている。

スタッフ氏名	清水睦美・甘利悠貴・家上幸子・今井美里・大林沙紀
内容・日時・場所・参加者数	①「まつ」総会参加 5月29日 1名 ②「まつ」理事会参加 5回 5名 ③「ライオン学校」支援活動参加（別紙参照）
収入金額	170,196円（別紙参照）
支出金額	706,632円（別紙参照）

すたんどばいみー基金（⑧）

事業概要	⑧参照
担当者名	⑧参照
対象者	貸与者6名
貸与額	4,850,000円